北海道言語研究会
研究例会報告

2017 年度の研究例会は以下の日程とプログラムで開催。参加者諸氏の間で活発な議論が交わされた。

・第 14 回研究例会

（9 月 26 日（火）13:30--16:30; 会場: 室蘭工業大学・教育研究 2 号館 Q502 号室）

13:30--14:15

三村竜之（室蘭工業大学・ひと文化系領域）

「アイスランド語の疑問文イントネーションの特質」

アイスランド語の疑問文は疑問詞の有無を問わず文末に下降調が現れることを発表者は指摘してきたが、次の二つの問題点が残されていた: (i) 一語文のような不完全な文構造の疑問文の文末音調; (ii) 平叙文（文末音調は下降調）との音調上の差異。本発表では、臨地調査を通じて発表者が採取した一次資料に基づき、上記の問題点に関して以下の結論を導く: i) 先行研究が着目してこなかった疑問詞のみからなる疑問文や文構造が不完全な疑問文に着目し、母語話者による読み上げ調査から得られた資料を精査した結果、文末音調は全て下降調であった。従って、アイスランドの疑問文は、疑問詞の有無や文構造が完全か否かを問わず、文末音調は一貫して下降調である; ii) 平叙文と疑問文のピッチ曲線から基本周波数の最高値と最低値の差の平均値を算出したところ、平叙文と疑問文を区別する有意義な差異は確認されなかった。

14:30--15:15

塩谷 亨（室蘭工業大学・ひと文化系領域）

「ポリネシア諸語における語・接語・接辞の区別について」

ポリネシア諸語の文法記述においては、しばしば、語(word)、接語(clitic)、接辞(affix)の区別が明確でない場合がある。そこで、複数の言語の事例を対照しながら、音・形態・統語の面からこれらの三つの範疇の共通の基準について考察する。同時に、ポリネシア諸語の共通の基準を考える場合にどのような問題点が生じるかについても考察する。

15:45--16:30

白尚 燁（室蘭工業大学・国際交流センター）

「地域言語学的観点から見た東ツングース諸語」

ツングース諸語は、同一系統の 10 から 11 ほどの言語で構成されている語族で、その地域的分布によって、東シベリアの北ツングース諸語、アムール川流域、沿海地方、サハリン島の東ツングース諸語、中国東北地方、新疆ウイグル自治区の南ツングース諸語の 3 つのグループに分類できる。本発表は、通言語的に観察される類型論的パラメータを取り入れ、3 つのグループのツングース諸語を比較・対照することで、ツングース諸語における東ツングース

諸語の文法的位置づけを明らかにすることを目的とする。

・第 15 回研究例会

（3 月 16 日（金）13:30--17:00; 会場: 室蘭工業大学・教育研究 2 号館 Q502 号室）

13:30--14:15

三村竜之（室蘭工業大学・ひと文化系領域）

「ストレス（強さ/強弱）アクセントにまつわる諸概念の整理と問題点の提起」

ストレス（強さ/強弱）アクセントはその音声学的な実態の解明が進む一方で、音韻論的な本質に関しては未だ明らかとなっていない点が少なくない。本発表では、北ゲルマン諸語におけるストレスアクセントを例にとり、音韻論におけるストレスアクセントとは何であるかについて考察する。

14:15--15:00

島田 武（室蘭工業大学・ひと文化系領域）

「北海道の 20 代前半の若者の言語使用と言語意識についての一考察: 「豚丼」、「なまら」、魚といえば？」などを例として」

本発表では、20 代前半の北海道方言話者を対象に、いくつかの語彙に関する使用と意識を報告した。例として「豚丼」と「豚汁」の読み方、「なまら」の語感と使用例、「魚といえば？」という問いに対する解答を取り上げた。その結果、「豚」という漢字の読み方に「ブタ」と「トン」の間で揺れがあること、「なまら」という語彙には「良い」語感と「悪い」語感の間で個人差があり肯定的な語感を持つ話者が多いこと、そして「魚」という語彙に付随する典型が「鮭」であることが明らかとなった。

15:30--16:15

藤田 健（北海道大学・文学研究科 言語文学専攻 西洋言語学講座）

「スペイン語とルーマニア語の定冠詞について」

スペイン語とルーマニア語の定冠詞の共通点・相違点を明らかにするため、文学作品の翻訳を用いてその分布を観察する。特に定冠詞と無冠詞との関係に着目し、 両言語における定冠詞の統語的特性を提示することを目的とする。

16:15--17:00

塩谷 亨（室蘭工業大学・ひと文化系領域）

「ポリネシア諸語における接辞と接語の区別について」

ポリネシア諸語に属する三つの言語、サモア語、タヒチ語、ハワイ語について、接辞か接語かという分類に違いが生じている例として、数詞句の冒頭に現れる形式と受動態の指標を取り上げ、それぞれ、接辞的であるか接語的であるか、共通の基準をあてはめて対照した。

『北海道言語文化研究』投稿規程

１.『北海道言語文化研究』への投稿は、資格を問わない。

２．投稿内容は、未発表であり、かつ投稿時に、他の学会等への発表の応募または投稿を行っていないものに限る。

3．原稿の応募は『WORD』で読める形式のファイル (docx ファイル)と印刷時の体裁確認のための PDF ファイル、もしくは印刷したもの (1部)を提出する。
宛先：92hashimot@gmail.com

５．原稿の書式は、スタイルシートに準拠させる。
http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/style/index.html を参照。

５．本研究会による電子化による公開を、著者が本研究会誌に投稿した時点で許諾したものとする。http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/journal.html

６．締切は各年度の 11 月 30 日とする。

７．投稿された論文については、2 名の匿名査読者によって査読を行う。

８．掲載の可否は編集委員会が決定する。

９．著者による校正は原則として初校のみとする。訂正は誤植に限るものとし，内容の変更は認めない。

10．印刷費は著者が実費を負担する（印刷費用によって変動あり）。

11．稿料は払わない。

（2010 年 3 月）

スタイルシート

(1)使用言語：日本語もしくは英語。
(2)原稿：『WORD』で読める形式のファイル (DOCX ファイル)と印刷時の体裁確認のための PDF ファイル、もしくは印刷したもの (1部)を提出する。送付時に、 WORD のバージョンを編集委員に知らせる。スタイルシートのテンプレートおよびPDF化用のフリーソフトに関しては、本研究会の WEB ページを参照。 (URL： http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/style/)
(3)余白(マージン)：上端 30mm 下端 25mm 左端 25mm 右端 25mm。
(4)行数：37 行。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
(5)字数：全角 39 文字または半角 78 文字。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
(6)フォント：和文は MS 明朝、MS P 明朝、英文は Times New Roman のみを認める。特殊文字を使用する際には、 unicode を用いることとし、その旨について投稿時に編集委員まで申し出る。
(7)ポイント数および書体 ：

題名：	18 ポイント	太字	中央寄せ
氏名：	14 ポイント	太字	中央寄せ
要旨：	9 ポイント「要旨」という文字のみ太字		
キーワード：	10.5 ポイント	「キーワード」という文字のみ太字	
本文：	10.5 ポイント		
セクション：	10.5 ポイント	セクション番号と題は太字	
謝辞：	9 ポイント	「謝辞」という文字のみ太字	
注：	9 ポイント	「注」という文字のみ太字	
参考文献：	9 ポイント	「参考文献」という文字のみ太字	

(8)タイトルおよび氏名：和文と欧文の2種類で書く。本文と同じ言語を先にする。和文の姓と名の間には全角の空白を 1 つ入れる。欧文の氏名は姓をすべて大文字にする (例：John BINTLET)。和文と欧文それぞれの間に 1 行の空白を入れる。
(9)ページ数：原則として図表を含め、 20 ページ以内とする。
(10)要旨：日本語でも英語でも可。場所はタイトルの下に 1 行空白を入れた後。分量は日本語の場合 400 字以内、英語の場合は 200 語以内。左右のインデントは全角 2 文字（半角 4 文字）、両端揃えにする。
(11)キーワード： 5 つ程度のキーワードを要旨の下に 1 行あけて書く。左右のインデントは全角 2 文字（半角 4 文字）。
(12)セクション (節)：セクションの番号は 1 から始める。セクションおよびサブセクションの番号の形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。
(13)段落：両端揃えにすること。段落の最初の文字の下げ方等の形式は問わないが一貫した書き方になっていること。
(14)注：通し番号をつけて脚注もしくは後注とする。通し番号の形式に指定はないが、一貫していること

と、番号が行頭に来ないようにすること。ただし過去における研究発表情報等はタイトルの後ろに ＊（半角アスタリスク）を付加し、注の先頭で言及する。

(15)参考文献：文献は本文の後ろ、後注がある場合には注の後ろに付加する。形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。

(16)執筆者紹介：①氏名、②所属機関・部署、③メールアドレス、④ URI、⑤電話番号等を論文末に付加する。①は必須。②以降は任意で、その他の事項も付け加えることができる。現在の所属機関がない場合には、元～でも可。

（2016 年 2 月 23 日改定）

雑誌の作り方*

---------１行あける--------------------

ジョン　ビントレット（邦文）

---------１行あける--------------------

How to Make a Journal

---------１行あける--------------------

John BINTLET

---------１行あける--------------------

要旨：本稿では、雑誌の作り方について○○○

---------１行あける--------------------

キーワード：雑誌　校正　○○○○○　○○○○○○

---------１行あける--------------------

1.　（セクションの題）

本文はこちらから○○○

1.1.　（サブセクションの題）

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

---------１行あける--------------------

2.（セクションの題）

○○○○○○○○○○

---------１行あける--------------------

謝辞

*　○○

---------１行あける--------------------

注（脚注でも可）

[1]　○○

---------１行あける--------------------

参考文献

○○○

---------１行あける--------------------

執筆者紹介
氏名：
所属：
Email：

注意：
①ヘッダーは偶数ページと奇数ページで設定が異なっています。
②テンプレートをダウンロードして使用する際には、既に打ち込んである文字を一文字残して入力してください。そうすると元の書式にしたがって、入力されます。全ての文字を消してしまうと、書式が異なってしまいますのでご注意下さい。

例：

1.　雑誌の出版形態

　本文はこちらから○○

↓

1.　雑誌の出版形態

　本現在のところ雑誌の出版の形態には、何種類...

↓

1.　雑誌の出版形態

　現在のところ雑誌の出版の形態には、何種類...

セクションの本文を打つときには、「本」という文字を残して、その後から入力を始めます。その後「本」という漢字を削除してください。一文字でも入力すれば削除可能です。

北海道言語文化研究　北海道言語研究会
No. 16, 2018.

How to Make a Journal*

--------- One line inserted --------------------

John BINTLET

--------- One line inserted --------------------

雑誌の作り方

--------- One line inserted --------------------

ジョン　ビントレット

--------- One line inserted --------------------

Abstract：○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○

---------One line inserted--------------------

Key words：○○○○○　○○○○○　○○○○○○

--------- One line inserted --------------------

1.　（Section Title）

○○○

1.2.　（Subsection Title）

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

--------- One line inserted --------------------

2.（Section Title）

○○○○○○○○○

--------- One line inserted --------------------

NOTES（or foot notes available）

(*)　○○

(1)　○○

--------- One line inserted --------------------

REFERENCES

○○○○○○○○○

--------- One line inserted --------------------

Author's Information: (Name is required; the others optional.)
John Bintlet
Muroran Institute of Technology
jbintlet　@mm.muroran-it.ac.jp

注意：

①ヘッダーは偶数ページと奇数ページで設定が異なっています。

②テンプレートをダウンロードして使用する際には、既に打ち込んである文字を一文字残して入力してください。そうすると元の書式にしたがって、入力されます。全ての文字を消してしまうと、書式が異なってしまいますのでご注意下さい。

例：

1. Publication of journals

○○○

↓

1. Publication of journals

○There are millions of ... (Start typing without deleting the first letter temporarily.)

↓

1. Publication of journals

There are millions of ...(After even one letter is typed, the first letter can be omitted with the format settings preserved.)

編集後記

この編集後記をご覧の方もよくご存じだと思いますが、今年の 2 月、ちょうど編集作業も終盤を迎えたころ、突如として北海道のことばが注目される出来事がありました。それは韓国の平昌で行われていた第 23 回オリンピック冬季競技大会において、銅メダルを獲得した女子カーリング選手たちの使っていた言葉がメディアやネットで大きく取り上げられたというものです。

紹介されたのは「そだねー」「～かい」「押ささる」などの言葉です。その中でも「そだねー」は瞬間的にブームと言えるほど取り上げられました。今回のオリンピックは全く追いかけていなかったので、雑談で話題に上ったときに初めて知り、その盛り上がりはブログや、Twitter のハッシュタグなどを通じて見かけるだけでした（NHK がおやつタイムを放映しなかったことに対して抗議があり動画を無料公開した事件は知っていました）。その後「そだねー」について「北海道方言」または「北海道訛り」と呼ばれるのを目にして、少し気になったので調べてみました。

注意を引いたのは、「そだねー」に対する方言意識です。今回の注目度の高さから、道外出身者に方言として認識されていることは確かですが、道民の持つ意識は少し違っていました。Twitter のツイートを追っていくと、当たり前すぎて方言とは認識していなかった、という意見と、自分は使わないし、周りにも使っている人はいないので北海道方言とは思えない、という意見が見られました。どちらも北海道方言とは認識していないということなのですが、「そだねー」を使用語として持っている話者と持っていない話者では意識が明らかに異なっています。この点では「そだねー」を北海道全域で使用される表現とするのは難しく、道内の地域方言という感じでした。

さらに調べていくと、道東の「そだねー」の使用地域と変種を詳細に報道したメディアがありました。2 月 26 日と 27 日放映のワイドショーの「とくダネ！」です。この放映をまとめたネットニュース[*1] には、「北見周辺の 32 の市町村に聞いたというから、しつこいというより、ほとんどビョーキだ」と書いてあったり、放映を見た視聴者のツイート[*2] では、放映された地図を提示して「余り興味ない」とあったり、そのついっぷるのコメントに「どこでどう境界があるかなんてどうでもいいよ」と書かれていたりして散々なのですが、方言調査に興味のある者としては、そのビョー的好奇心の結果が大変貴重な気がしました（言語調査をやってるなんて言うとビョーキだと言われる可能性があることも実感しましたが）。その記事では、「そだね?」と「そ（ぅ）だね?」が混在、と出ていました（表記は原文ママ）。

別の記事[*3] では、北見市観光協会（一般社団法人）観光振興課長の石井義和さんに話を聞いたところ、「言葉として違和感はないのですが、一方で、周囲で使っていることを耳にすることも、あまりない」、「若い人、特に女性は、仲間同士の会話で使っているかもしれない」、「浜の方の言葉という印象もあります」ということです。この「浜の方」というのがオホーツク海に面した常呂町のことで、女子カーリングチーム「LS 北見」の本拠地です。そして常呂町観光協会事務局の中原一人さんに質問したところ、「『そだねー』は、よく使ってます。世代、男女は問いません」と言う返答があったそうです。

これらのことを踏まえて音声を聞いてみると、確かに「そだねー」という発話もありますし、「そーだねー」のように完全に長いとまでは言えないのですが、「そ」を少し伸ばした「そぉだねー」のような発話もありました。他にも音声的にはいろいろ言えることがあるのですが、本業的に少々うるさくなるので割愛します。YouTube には動画が豊富にあるので、興味をお持ちの方は聞いてみるのも一興かと思います。また今回「そだねー」を調べていくうちに、LS 北見の設立に関わる話を知り、心を動かされました。これからのご活躍を祈念しつつ筆を置きたいと思います。

[*1] https://www.j-cast.com/tv/2018/02/27322235.html
[*2] https://twitter.com/yuzunowa999/status/968273040910860288
[*3] https://www.j-cast.com/2018/02/26322179.html

(T. S.)

北海道言語研究会　URL: http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/index.html

本研究会は談論風発のくだけた雰囲気の集まりで、言語に関するあらゆる分野に興味のある方に開かれています。皆様のご参加、ご発表、ご投稿を心よりお待ちしております。

『北海道言語文化研究』への投稿について

本誌に研究論文の投稿をご希望の方は、スタイルシートに則った原稿を下記宛にお送りください。締め切りは11月30日です（消印有効）。原稿受領後、編集委員が査読を行い、掲載の可否を決定します。発行後、本誌を数部（印刷費用によって変動します）進呈いたします。スタイルシートに則ったファイルをご希望の方は、本研究会WEBページからダウンロードできます。ご活用下さい。

研究発表について

本研究会では随時研究会を開催しています。研究発表をご希望の方は、下記宛に発表の題目と要旨をお送りください。持ち時間は発表40分質疑20分です。発表者は抄録を『北海道言語文化研究』に掲載することができます。開催日時に関しては、受付後、後日メーリングリストや本研究会WEBページでお知らせする予定です。

北海道言語文化研究 第16号

2018年3月31日発行

発行者：北海道言語研究会

連絡先：92hashimot@gmail.com

〒050-8585

北海道室蘭市水元町27-1

ひと文化系領域

北海道言語研究会事務局